⑪ 安田島（あんだじま）の徹水洞（てっすいどう）

「こんなに広くて、平らな土地があるのに、水田として利用できないのか。」
「水さえあれば、水田を造って、米がとれる。そしたら、わしらのくらしも今より楽になるのに。」
安田島は、紀ノ川の流れが、二つに分かれていたころの中州が九度山（くどやま）とつながってできたところです。しかし、安田島より紀ノ川の水位が低いため、水田として利用できなかったのです。
（安田島の南の山をこえると、丹生（にゅう）川が流れている。しかも、安田島より、高いところを流れている。その山のふところにあなを開け、トンネルをほって、水を引くことはできないだろうか。）
このように、人びとは、安田島に水を引いて米を作ることを、いつも夢見ていました。
一八六二年、この土地の領主である高野山の興山寺（こうざんじ）が、人びとの願いを聞き

入れ、丹生川の水をせき止めて安田島へ水を引こうとしました。しかし、おりからの大雨で、安田島の松林から苦労して運んで作った丹生川のせきが、水圧に耐えかねて、押し流されてしまったのです。集まった人びとは、無残にもこわされたせきをながめながら、くちびるをかみしめたのでした。

その中にまじって、喜多山八十郎の姿がありました。

「わしは、九度山で生まれ、九度山で育った人間じゃ。わしはこの村が大好きじゃ。わしがきっと安田島へ丹生川の水を引いてやる。」

八十郎は、なみだを流す人びとを見て、こう心に決めたのでした。

それからというもの、八十郎は、鉱山業もやめ、安田島へ水を引くことに日々を費やしていったのです。

「いよいよ工事が始まる。今度こそ成功するにちがいない。」

「安田島に、いなほがゆれるのも、もうすぐだ。」

村のあちこちで、こんな話がされ、村人の期待はたいへんなものでした。

一八七一年、北と南の両方からほり始めました。途中で出会おうというのです。つるはしやくわを使う苦しい、気の長い工事です。しかも、岩盤は非常に

かたく、予想以上に費用がかかりました。八十郎は、自分の財産のすべてを投げ出しましたが、それでもまだ足りません。その上、南と北からほってきたトンネルに、上下一・三メートルもの食いちがいができてしまったのです。

八十郎は、坑内(こうない)に立ちつくしたまま、こぶしをにぎりしめ、かべを何度も何度もたたきつけました。

「何ということだ、ここまで来たのに……。この徹水洞ができなければ、わしはここで死ぬんだ。」

八十郎は、そうさけぶと、坑内にこもってしまったのです。

安田島の開発に命をかける八十郎のこの姿を見て、人びとは、彼を応援(おうえん)し、協力しました。また、資金集めにも走り回りました。そして、止まっていた工事も再開され、着々と進められていきました。

一八七三年六月、ついに長さ百二十六メートルの徹水洞が完成したのです。

その日、安田島には、大勢の人びとが、かけつけていました。そこには、八十郎の姿もありました。今日は、長い間待ち望んでいた丹生川の水が徹水洞を通り、流れてくるのです。

やがて、大きな音を立てて、待っていた人びとの前に、夢にまで見た水が流れてきました。

「やったあ、水だ。水がきた。」

そのしゅん間、八十郎は、大きな声を上げて泣きました。みんなもいっしょに泣きました。

この水は、十数ヘクタールの田に引かれ、人びとに豊かな実りをもたらしました。

そして、後の一九〇九年、人びとは、「徹水洞功労者　喜多山翁　記念碑」を立てました。その記念碑は、今も、安田島に残されています。